

探究学習コーディネーターとも連携し、一人ひとりが課題を設定する探究的な学習に

宮城県 気仙沼市教育委員会

宮城県気仙沼市教育委員会は、子ども一人ひとりが課題を設定して探究的な学習ができるようになることを目指し、学校と地域をつなぐ活動をしてきた地域人材を「探究学習コーディネーター」として全市立小・中学校に派遣している。探究課題の設定の際には、子どもの発想を肯定しつつ、「なぜ?」と思考を深める問いかけを繰り返すことで、子ども一人ひとりが内発的動機づけを持って設定できるように支援。多彩な課題に向き合いながら、子どもたちは、これまで以上に意欲的に探究に取り組んでいる。

宮城県 気仙沼市 プロフィール

◎宮城県の北東端に位置。天然の良港である気仙沼湾は、遠洋漁業の基地として栄え、世界中から漁船が訪れて停泊する。2011年の東日本大震災では甚大な被害を受け、現在、防災・減災、スローフードなど、持続可能な町づくりを推進する。

人口 約6万人 面積 332.44km²
市立学校数 小学校 14校、中学校 11校*1
児童生徒数 約3,700人
教員数 約450人

個別に探究課題を設定することで、より質の高い探究へ

宮城県気仙沼市立の小・中学校では、「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）が始まった2002年度からESD*2に取り組んできた。その特徴は、環境や国際理解、地域遺産、エネルギー、食育、防災など、各学校で地域に根差した多様なテーマを決め、地域と連携した体験学習を軸に子どもの学びを深めてきたことだ。

一方、市内4つの高校では、東日本大震災以降、地域課題をテーマとした探究的な学習（以下、探究学習）が活発に進められ、宮城県気仙沼高校には探究に力を入れて取り組むコースが設置された。高校生の意欲的な探究を後押ししようと、市が主催して市内高校生が探究学習の成果を発表するイベント*3も実施。地域住民との交流イベントの開催や、震災体験の語り部活動など、高校生による地域貢献という成果も見られている。

それらを背景に、小・中学校、高校をつなぎ、探究学習の質をより高めようという機運が生じてきたと、

気仙沼市教育委員会（以下、市教委）学校教育課の小松幸恵副参事は説明する。

「小・中学校の探究学習では、子どもの発達段階や教員の負担などの理由から、個人ではなくグループでの活動が主体でした。それを一歩進め、子どもが個々に持つ関心や課題に沿った『学習の個性化』を図ることで、より質の高い探究学習に結びつけたいと考えていました」

そうした折、2019年に、市内の中・高生の学びを支援し、地域の活性化を手がけてきた地元の一般社団法人から、市教委に「市内の小・中学校での探究学習を支援することで、小・中・高の学びをより充実できないか」といった提案があった。同団体の代表を務める加藤拓馬氏は、東日本大震災のボランティア活動をきっかけに、復興のまちづくりにかかわる中で、人づくりの大切さを実感し、「地域×教育」をテーマにした漁師体験などの体験型プログラムを中・高生を対象に提供してきた。さらに、2016年度から同市立唐桑中学校での総合学習を、2017年度からは高校生の探

お話を聞いた方



教育部学校教育課
副参事（指導主事）

小松幸恵

こまつ ゆきえ

公立小学校教員を経て、2020年度から現職。



教育部学校教育課
主査

千葉幸美

ちば ゆきみ

2018年度から現職。



探究学習コーディネーター

加藤拓馬

かとう たくま

東日本大震災直後から気仙沼市に移住。2015年に一般社団法人まるオフィスを設立。代表理事を務める。

※プロフィールは、取材時(2022年3月)のものです。

究学習を支援する中で、小・中・高の探究学習をつなげれば、さらに深い学びになり、子どもにとっての大きな価値になると考えた。

「小・中学校には市外から異動してくる先生方も多いので、私がまちづくりにかかわる中で知り合った農業や漁業、企業などで地域を支えてい

*1 2022年度から、中学校は10校となる。 *2 Education for Sustainable Developmentの略。「持続可能な開発のための教育」と訳される。環境、貧困、人権、平和などの地球規模の課題を自らの課題として捉え、身近なところから取り組むことで、課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すことや、それによって持続可能な社会を創造していく姿勢の育成を目指す学習や活動のこと。 *3 「気仙沼の高校生マイプロジェクトアワード」のこと。5回目となる2021年度は32組が出場。

る方々と、先生や子どもを結びつけるとともに、中・高生の探究学習にかかわってきた経験を生かした支援ができると、教育委員会に提案しました」（加藤氏）

個人別の探究学習を支援する 探究学習コーディネーターを派遣

2020年度、市教委はその提案を「探究学習支援事業」として施策化。市立小・中学校に「探究学習コーディネーター」（以下、コーディネーター）として派遣することにした。2020年度は、小学校3校、中学校2校をモデル校とし、コーディネーターは加藤氏を含めた2人。2021年度は、対象を全市立小・中学校25校に拡大し、コーディネーターも3人に増やした。

学校教育課の千葉幸美主査は、支援の方針を次のように説明する。

「体験的な学習が活発な小学校では、地域人材と連携したフィールドワークやワークショップが一層充実するような支援を中心としました。一方、中学校では、高校での探究学習の充実にもつながるよう、生徒一人ひとりが探究課題を設定する探究

学習の支援に力を入れました（図1）」

市教委では、各学校へのコーディネーターの派遣回数などは設定せず、各学校が必要に応じてコーディネーターに支援を依頼し、両者の話し合いによって来校の頻度や教員との役割分担等を決める形とした。2021年度の派遣回数は、小学校で39回、中学校では196回にも及んだ。

問いかけて内面を顕在化し、 生徒に内発的動機づけを図る

2020年度にモデル校となった同市立松岩中学校では、個人ごとに課題を設定して探究学習を進めるにあたり、年度初めのオリエンテーションから、課題設定、調査・フィールドワーク、発表会までの8か月間で、計20回の訪問をコーディネーターに依頼した。

特に課題設定の時には、重点的に支援をお願いし、1時間目にはコーディネーター2人が2クラス約60人に、1人5分程度の個別相談を実施。2時間目は、課題の構造化の方法を解説した後、担任とコーディネーターの4人で2つの教室を回り、困っている生徒に個別に声をかけていった。

その際、コーディネーターは、生徒を「指導」するのではなく、生徒が自ら課題を見いだせるよう「ファシリテーション」*4をしていったという。

「『やりたい!』という内発的動機づけがあってこそ、探究は深まります。生徒の発想には、まず『いいね』『面白そうだね』と肯定してから、『なぜその課題にしたの?』『どうしてそう思ったの?』と問いかけ、内面にある課題意識を顕在化させ、課題設定につながるようにしました（図2）。問いかけ、待って、引き出すことを意識しながら支援しています」（加藤氏）

課題設定に困っている生徒については、その状況をコーディネーターにも共有し、意図的に何度も声をかけて相談に乗るなど、手厚く支援。一方、課題が具体化してきた生徒には、その内容に応じて、コーディネーターから移住・定住支援センターや外国人技能実習生がいる企業など、地域の課題を見いだすきっかけとなりそうな人物を紹介してもらった。

「教室で考えたことが地域の現実につながっているという感覚を持つことが、探究が深まるポイントです。コーディネーターには、生徒が地域の人と直接対話をする機会を、積極的に設けてもらうようお願いしました」（小松副参事）

多彩な活動、意欲を高める姿に 個別の探究学習の価値を実感

最終的に3年生の大半は、自分で

図1 「気仙沼探究LOG」のウェブサイト



各小・中学校での探究学習の様子や、コーディネーターの支援内容は、ウェブサイトで発信している。

https://note.com/k_tanq_log

図2 探究学習コーディネーターの生徒へのファシリテーション例

生徒「市の人口が減っているのが気になります」

コーディネーター「人口減少の要因って何だろうね？」

生徒「生まれる子どもが少ないから減るのかな……」

コーディネーター「そうだね、ほかには？」～（生徒が調べる）

生徒「町を出て行く人が多いから減る」

コーディネーター「そうだね。その2つに対して、市や町は何かしているのかな？」～（生徒が調べる）。「何か面白そうな対策はあった？」～（生徒がピンとくるものを一緒に探す）

生徒「気仙沼にも移住・定住支援センターがあるんですね」

コーディネーター「知り合いがいるから、センターの人に話を聞いてみる？」

→移住・定住支援センターの職員とオンラインで話ができるようにコーディネーター。

*取材を基に編集部で作成。

*4 仕事や学び、議論などの活動がスムーズに進むよう、導き、支援する手法のこと。

個別の課題を設定できた。「防災無線の聞こえ方の違いの研究」「ゴミの出し方のルールをインドネシア語に翻訳」など、中学生ならではの多彩な探究学習が行われたという。

「最終発表会后、先生方は『生徒が1人でもこんなにしっかりと探究に取り組めたのは、予想以上だった』と話していました。生徒が自分で課題を考え、主体的に学びを進めていく姿を目のあたりにし、一人ひとりが課題を設定して探究学習を行う価値を実感したようでした」(小松副参事)

また、同市立鹿折^{しより}中学校では、個別の探究活動に意欲的な生徒の要望に応えようと、2021年度に非公式の部活動として「マイプロジェクト部」を立ち上げた。1～3年生の有志7人が参加し、「外国籍住民の防災」や「サメの魅力を広める」など、一人ひとりが課題を設定し、夏季休業中にフィールドワークを実施。年度末には全校生徒の前で成果を発表した。

部のメンバーが自分の活動を生き生きと語る姿に、聞いていた生徒は、これから授業で取り組む探究学習への意欲が高まり、教員は個人ごとの探究学習をイメージできたという。

ファシリテーション力をさらに高める教員研修を各学校で実施

コーディネーター派遣の対象をすべての市立小・中学校に拡大した2021年度は、教員研修にも力を入れた。同事業の予算は地方創生推進交付金を利用しているため、2023年度の事業終了までに、すべての教員のファシリテーション力をさらに向上したいからだ。

「教員研修では、コーディネーターの支援も受けながら、教員が子ども一人ひとりの探究学習に伴走して、ファシリテーションができるようになることを目指しました」(千葉主査)

ある教員研修では、地元の高校生が探究学習の成果を発表した動画を見ながら、審査員として評価するワークショップを行った(図3)。

「地元の高校生が堂々と発表する姿を見ることで、中学生が育っていく姿をイメージできます。加えて、どの点をどう評価するかを考えながら発表を見ることで、探究学習では生徒をどのように支援すればよいかを考えられる形にしました」(加藤氏)

各学校とコーディネーターとの連絡には、ビジネスチャットツールを活用。電話では授業や会議などで互

いの連絡がつきにくかったが、同ツールによって、時間にとらわれずにやり取りができるようにし、気軽に相談できる体制を整えた。

また、市教委とコーディネーターとの打ち合わせを月1回実施。各学校の進捗を共有し、児童生徒への支援や活動の方向性をすり合わせている。

コンソーシアム^{*5}を設置し、地域全体で探究学習の個別化を支える

文部科学省の「全国学力・学習状況調査」における「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの活動に取り組んでいる」の設問では、2021年度の同市の肯定率^{*6}が、小学生で+9.8ポイント、中学生で+18.8ポイント、全国平均を上回った。

年度末には、生徒だけでなく、教員も振り返りを行って成果と課題を見だし、次年度の学習や指導に生かせるようにした。2021年度末に行った教員対象のアンケートでは、「生徒への声のかけ方や視点の与え方が参考になった」「ファシリテーションの手法は、日々の授業での指導にも生かしたい」など、コーディネーターの子どもへの接し方が指導の参考になったという声が多く上がった。

現在、個人ごとの探究学習を地域全体で支援できるよう、産学官のコンソーシアムの設置準備をしている。

「子どもがそれぞれに見いだした地域の探究課題を深める際には、地域の多様な人材がかかわりながら、子どもの学びを支援しやすくなる仕組みを考えています。コンソーシアムの運営にも参画できるように、コーディネーターの人数の拡大も検討中です。子ども一人ひとりの関心を深められる探究学習の実現をこれからも目指していきます」(小松副参事)

図3 教員研修でのワークショップ例

- 1 「気仙沼の高校生マイプロジェクトアワード」で発表した高校生3人の動画を視聴する。
- 2 同アワードで、市長や教育長ら審査員が使用したものと同一審査シート(評価項目は、主体性2項目、協働性2項目、探究性3項目)を用いて模擬審査を行う。
- 3 3～4人のグループを組み、次の4つのテーマでディスカッションをする。
 - なぜその点数をつけたのか
 - 何を評価したのか
 - その発表はどうすれば満点になったのか
 - 満点を取るためにどういった機会があればよいか
- 4 「探究学習を通して育みたい生徒の力をあえて1つに絞るなら何か」を各自でA4判の用紙に大きく記入する。
- 5 一人ひとりが書いた育みたい力と理由を発表し合う。

※「気仙沼探究LOG」を基に編集部で作成。



*5 企業や団体、個人など、2つ以上の組織が、共通の目的の下、協力し合う共同体のこと。 *6 「あてはまる」+「どちらかといえば、あてはまる」の合計。

探究学習の個別化の取り組み

「防災×●●」で課題設定のハードルを下げ、中学1年生から個人で探究

はしかみ
気仙沼市立階上中学校

2か月かけて、一人ひとりが課題を設定

気仙沼市立階上中学校は、2021年度から全学年で、生徒各自が興味・関心のある分野と防災とを掛け合わせて「防災×●●」という課題を設定し、個人で取り組む探究学習を行っている。藤山篤教頭は、その理由を次のように説明する。

「グループ学習では、活動に意欲的でない生徒がどうしても学びから離れてしまうことがあります。一方で、意欲の高い生徒は、自分が関心のある課題をどんどん深めていきたいはずです。そこで、内容が未熟だとしても、1年生から個人で取り組む探究学習にしました」

同校では元々、総合学習においては、3年間を通じて「防災」をテーマにグループによる探究学習を実施してきた。その軸は変えないことで、どのような課題があるのかを生徒がイメージしやすいようにしつつ、個人ごとに課題を設定する「学習の個性化」を図るようにした。また、総合学習の授業の大半を、3学年で同じ時間に実施。コーディネーター3人には、全25時間のうち、ほぼ毎時間で支援を依頼した。

総合学習での探究学習は、5月上旬の運動会終了後に開始。まず、「防災×●●」というテーマで個人で探究していくことを伝えた後、コーディネーターから、探究学習の進め方や社会環境の変化の解説などをしてもらった。そして、震災遺構の見学や、「防災×海」をテーマにした講演会なども行いながら、6～7月にかけて一人ひとりが課題を設定していった。

課題設定の授業では、「地域をもっとよくするには？」をテーマに各自で考えた後、グループ内で発表。教員やコーディネーターは、「いいね!」「なぜそう思ったの?」と生徒が考えを深められるように問いかけた。次に、各自の興味・関心

開校 1947(昭和22)年
校長 田中謙先生
生徒数 104人 学級数 4学級
教員数 18人



教頭
藤山 篤

とうやま・あつし

同市立松岩中学校の教頭から、2021年度、同校に赴任。

※プロフィールは、取材時(2022年3月)のものです。

を1人1枚ずつ付せん紙に書いて模造紙に貼り、全校生徒で見て、語り合いながら、それぞれが課題を見直す活動を行うことで、より具体的な課題を設定していった。

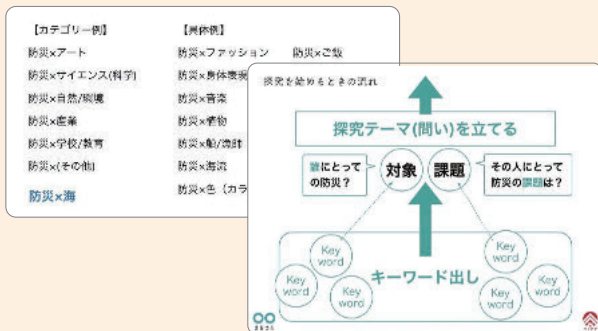
高校での学びや将来の夢につながる生徒も

9月からは、それぞれの課題に応じて情報収集やフィールドワークなどを行い、探究を深めていった。課題の分野別に学年縦割りで6つの班を作り、個人で探究しつつも、フィールドワークなどで一緒にできる活動はグループで行った。

「コーディネーターは、生徒の課題それぞれに対して、詳しく話を聞ける地域の方をすぐに紹介してくれ、連携がスムーズに進んで助かりました。地域の生の情報に触れた生徒は、一層真剣に課題について深く考えていました」(藤山教頭)

10月末に中間発表会を行った後、11月からは実践と、まとめ・発表の準備に取り組み、12月初旬に発表会を2時間かけて実施。学年縦割りの12班に分け、1人あたり発表8分間、質疑応答2分間として行った。生徒は、調査や実践を踏まえ、防災意識を高めるゲームなどを提案した。「防災×町歩き」というテーマで、避難経路を周遊する観光マップを考案した3年生の生徒は、高校進学後はマップのアプリ化を目指し、将来は防災に関する起業が夢だと語った。

「実施初年度は試行錯誤の連続でしたが、しっかりサポートをすれば1年生でも個人で探究できることが分かりました。また、キャリア教育につながるという手応えも得られました。生徒に年齢が近く、地域に詳しいコーディネーターが、教育への情熱を持って生徒を支援してくれたことは、探究学習の個別化の大きな力になったと感じています」(藤山教頭)



▲5月下旬に行なったガイダンスで、課題設定の考え方を説明した際のスライド。「誰にとっての防災か」「その人にとって防災の課題は何か」を考えるとキーワードが思い浮かびやすくと説明。「防災×●●」の具体例を示したところ、生徒から「防災×お金」「防災×犯罪」といったキーワードが次々と挙がった。 ※まるオフィスの提供資料をそのまま掲載。

Web VIEWnext ONLINE

階上中学校が取り組む探究学習は、ウェブサイト「VIEW next ONLINE」で詳しく紹介! 右記の2次元コードからもアクセスできます。

